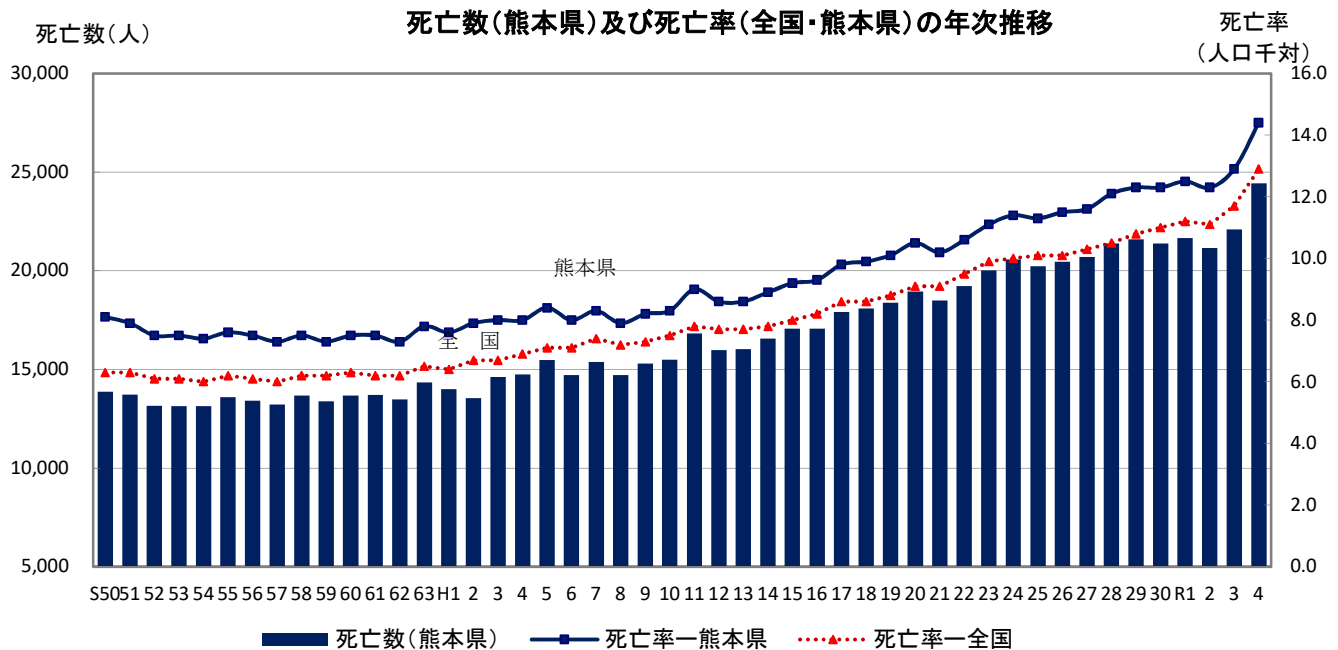


3. 死亡

(1) 死亡数が、出生数を12,552人上回る

令和4年の本県の死亡数は24,427人で、死亡率（人口千対）は14.4で前年より1.5ポイント増加した。また、全国の死亡率（人口千対）は12.9で、前年より1.2ポイント増加した。

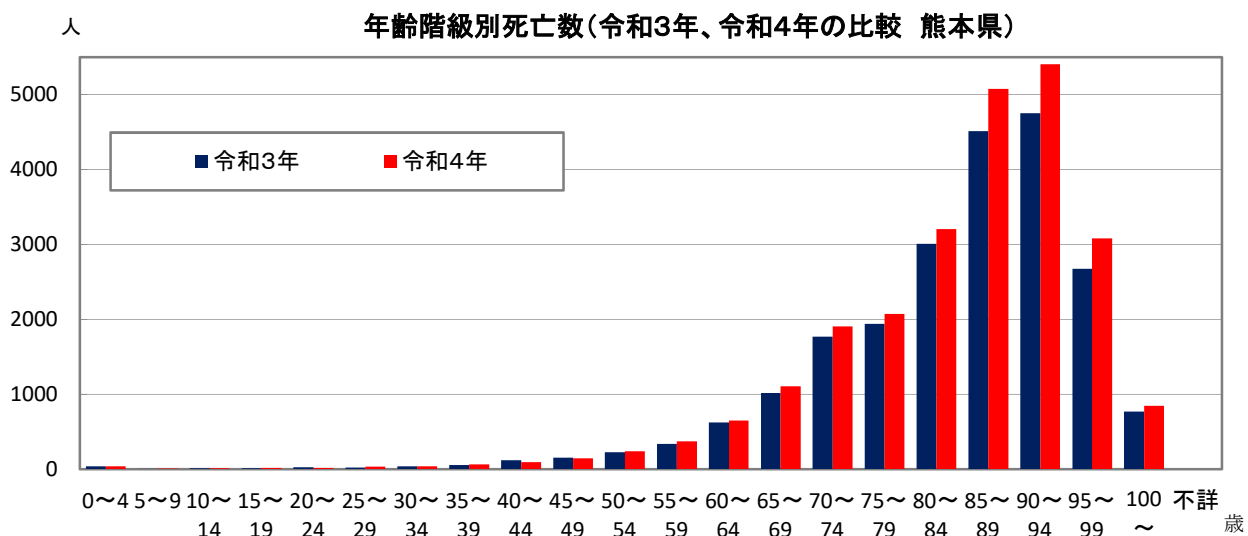


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(2) 令和4年の死亡数は、前年に比べ2,334人増加

本県の令和4年の死亡数は、前年より2,334人増加した。前年と比較すると、年齢階級により増減は様々だが、全体で見ると1.5ポイントの増となっている。

また、最も死亡数の多い階級は、90～94歳の5,403人、次いで多い階級は85～89歳の5,078人であり、この2階級をあわせると、全体死亡数24,427人の42.9%を占めている。



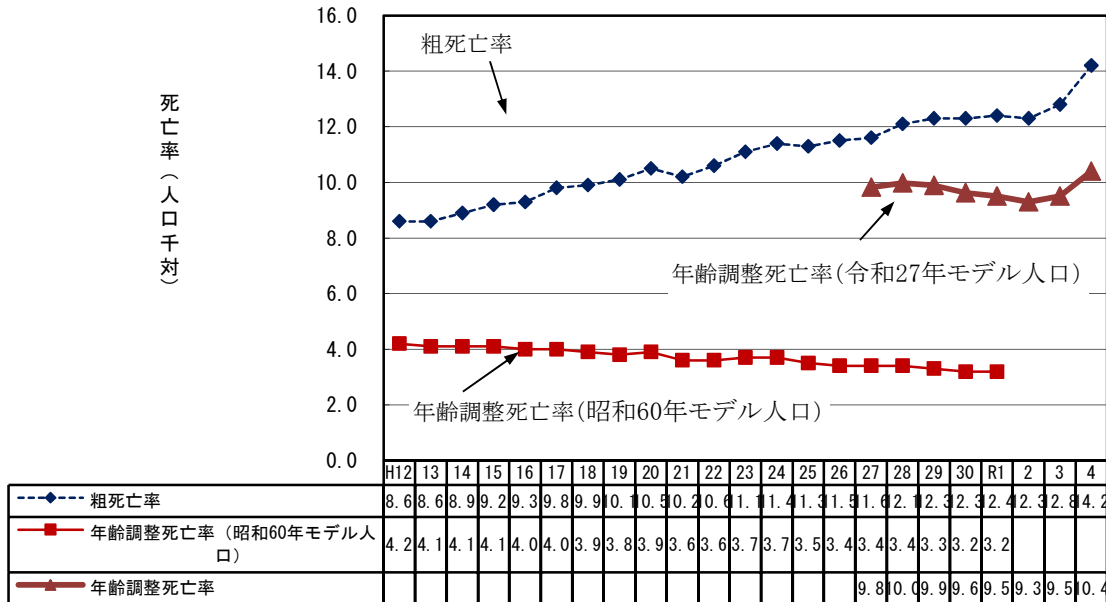
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(3) 年齢調整死亡率は10.4（人口千対）

本県の令和4年の粗死亡率（人口千対）は、14.2で前年より1.4ポイント増加した。平成27年全国モデル人口を基準に人口構成を補正した令和4年の「年齢調整死亡率」は、前年より0.9ポイント増加し10.4だった。

※「年齢調整死亡率」の算出方法については、本書の巻末「用語等の説明」参照。

粗死亡率と年齢調整死亡率の推移（熊本県）



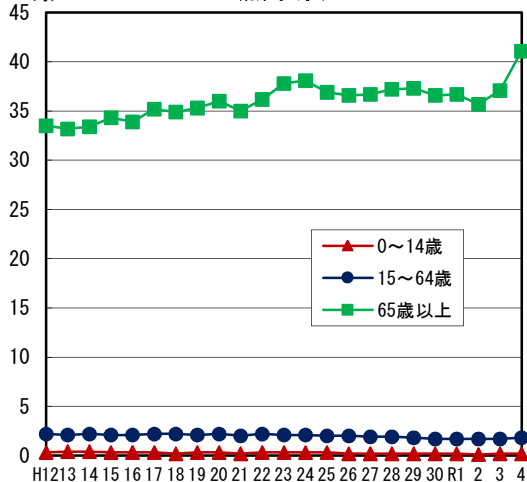
- 注) 1) 年齢調整死亡率の基準人口は、令和2年に昭和60年モデル人口から平成27年モデル人口に変更された。
 2) 粗死亡率は、年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率と呼んでいるものである。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

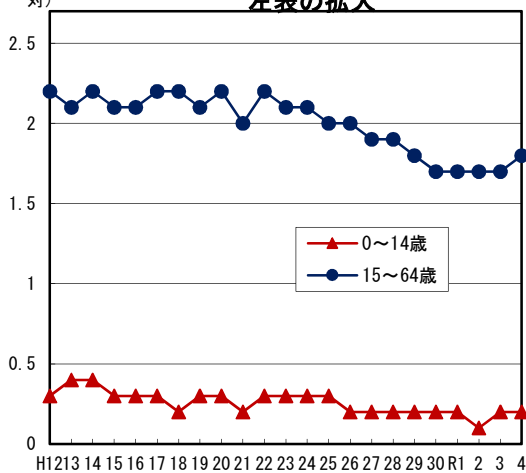
(4) 年齢3区分別死亡率は、65歳以上が4.0ポイントの増

死亡率（人口千対）の年次推移を年齢階級3区分別にみると、令和4年は0～14歳が0.2で横ばい、15～64歳が1.8で0.1ポイントの増、65歳以上が41.1で4.0ポイントの増であった。

年齢3区分別死亡率の推移（熊本県）



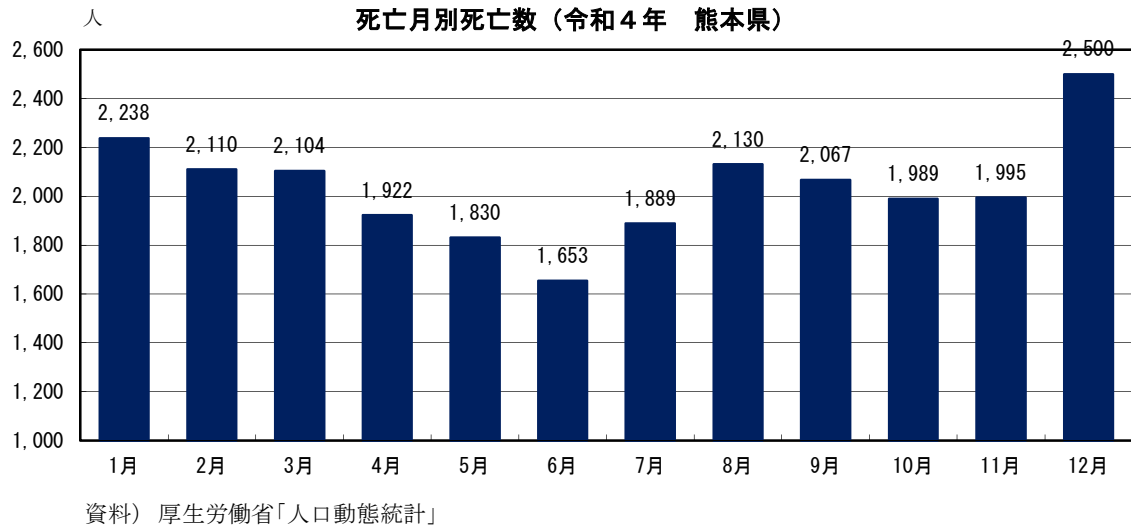
年齢3区分別死亡率の推移（65歳未満 熊本県）
左表の拡大



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(5) 死亡数が多い冬期

死亡数を月別にみると、寒くなる12月から3月にかけて多くなっている。



(6) 全国より高い主な死因別の死亡率（人口10万対）

令和4年の主な死因別の死亡率（人口10万対）を全国値と比較すると、主な死因では肝疾患を除き本県の方が高くなっている。

主な死因による死亡率（人口10万対） 熊本県と全国との比較

令和4年

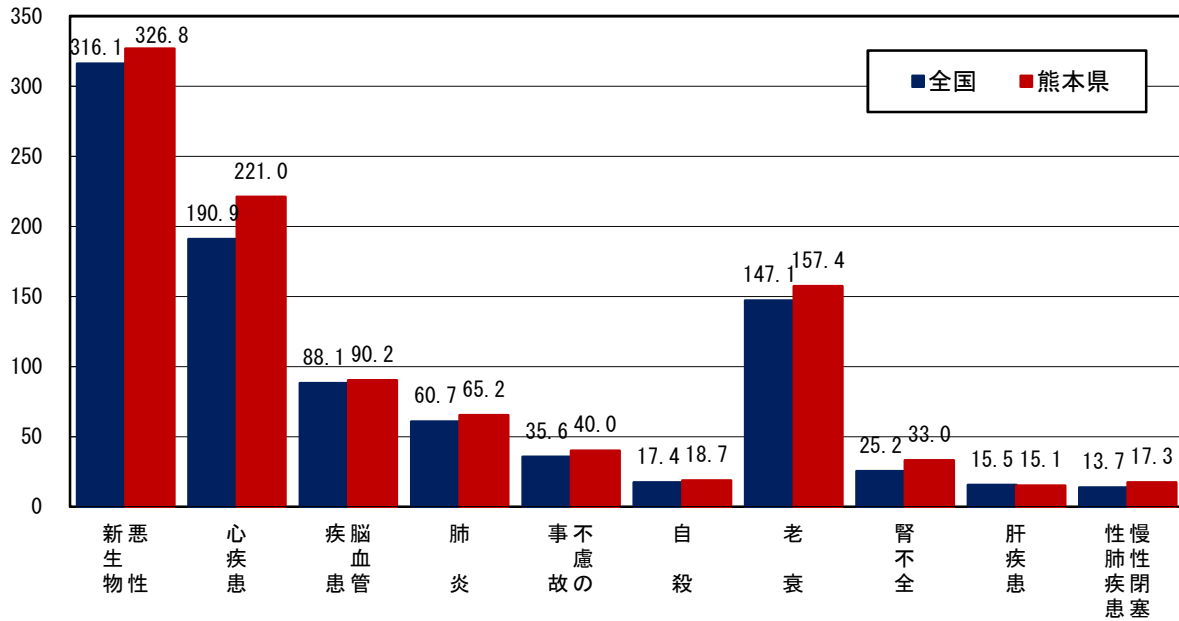
死 因	熊本県 死亡数	熊本県 死亡率	全国順位 (降順)	全国 死亡率	全国1位 (降順)	全国47位 (降順)
悪性新生物	5,552	326.8	26位	316.1	秋 田 県 460.0	沖 縄 県 239.4
心疾患	3,754	221.0	18位	190.9	山 口 県 272.4	愛 知 県 132.5
脳血管疾患	1,532	90.2	31位	88.1	秋 田 県 169.9	滋 賀 県 66.4
肺炎	1,107	65.2	23位	60.7	山 口 県 107.8	沖 縄 県 37.3
不慮の事故	680	40.0	23位	35.6	富 山 県 56.4	沖 縄 県 21.9
自殺	318	18.7	14位	17.4	秋 田 県 22.6	徳 島 県 12.9
老衰	2,675	157.4	23位	147.1	山 形 県 237.5	福 岡 県 101.1
腎不全	561	33.0	14位	25.2	高 知 県 46.2	神 奈 川 県 17.3
慢性閉塞性肺疾患	294	17.3	7位	13.7	徳 島 県 19.8	愛 知 県 10.1
肝疾患	257	15.1	30位	15.5	沖 縄 県 25.2	滋 賀 県 10.3

	熊本県	全国順位	全国	全国1位 (降順)	全国47位 (降順)
65歳以上人口の割合 (R03.10.1人口推計：総人口)	32.4%	23位	29.5%	秋 田 県 38.8%	東 京 都 23.6%

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率
(人口10万対)

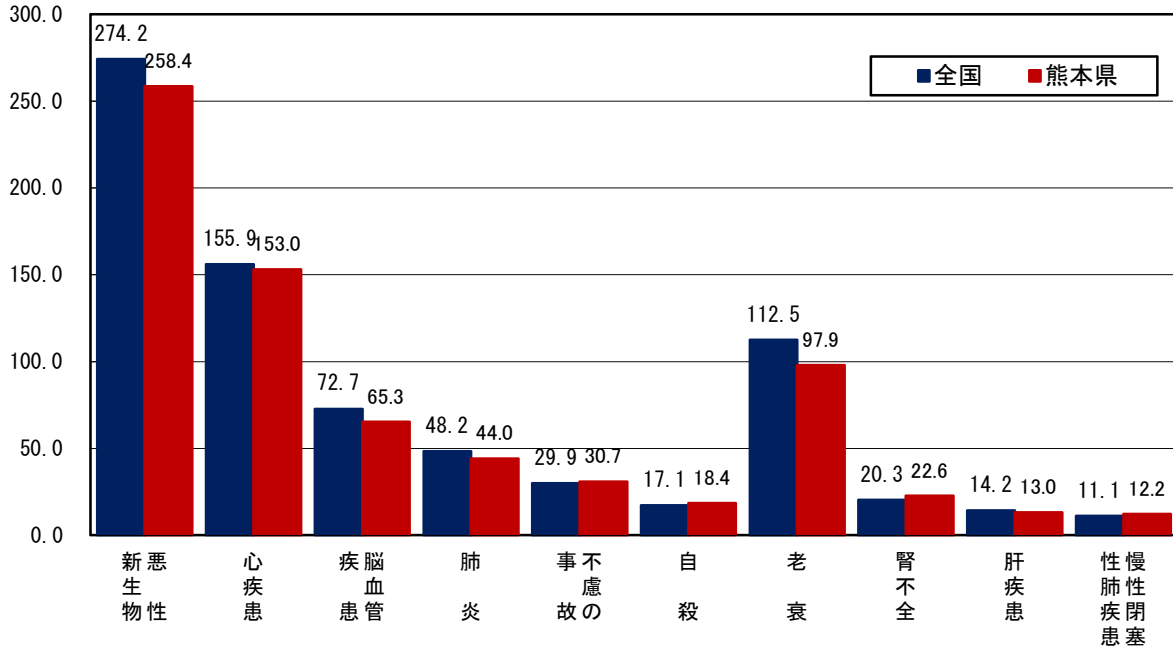
主要死因別粗死亡率の県と全国の比較（令和4年）



注) 粗死亡率は年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率とよんでいるものである。
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率
(人口10万対)

主要死因別年齢調整死亡率の県と全国の比較（令和4年）

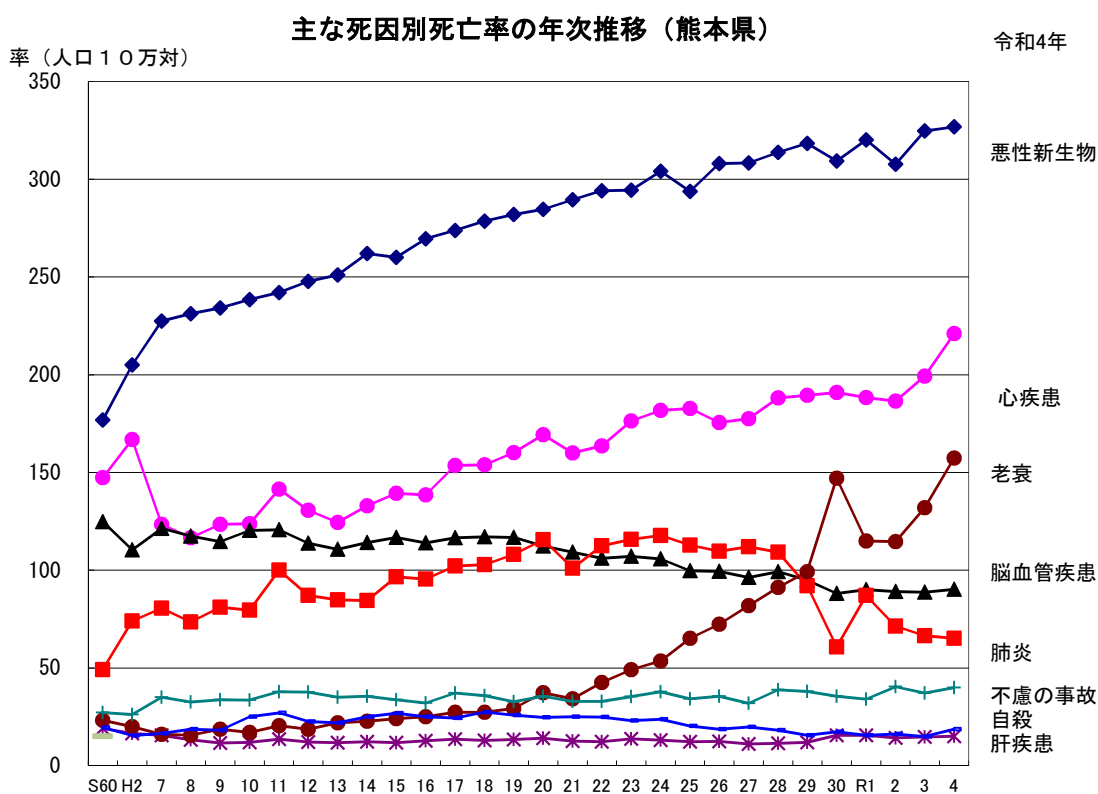


注) 年齢調整死亡率は、平成27年全国モデル人口を基準とした。
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(7) 令和4年の主な死因別死亡率は、肺炎以外が増加

令和4年の本県の主な死因別死亡についてみると、悪性新生物の死亡数が5,552人で、死亡率（人口10万対）は326.8であり、死亡総数の22.7%を占めて死因順位の第1位となっている。第2位は心疾患、第3位は老衰だった。

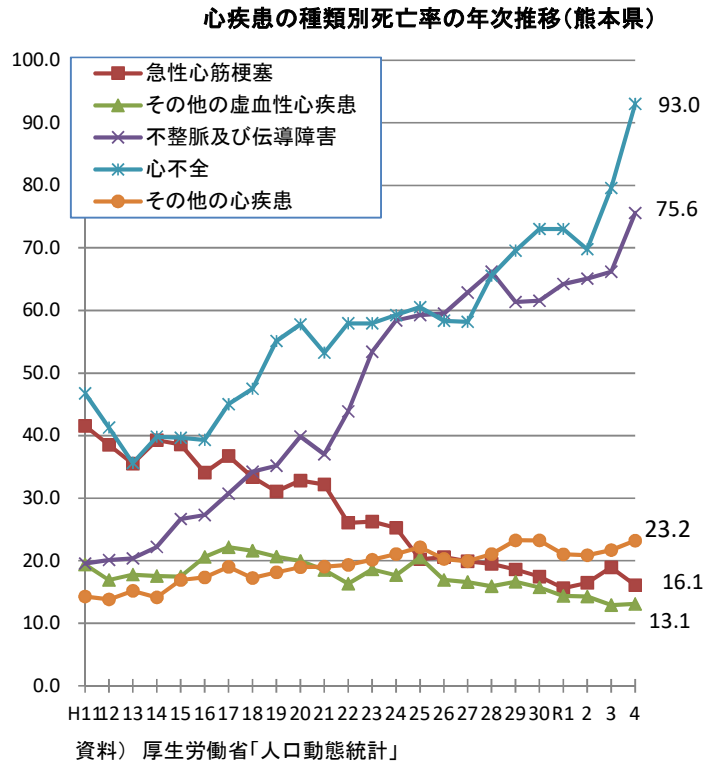
なお、平成6年から平成7年にかけての死因別死亡の急激な変化は、国際疾病分類の第10回修正（ICD-10）の影響によるものと考えられる。



注) 平成7年から疾病分類が変更されたため、「肝疾患」は平成6年までは「慢性肝炎・肝硬変」
資料)厚生労働省「人口動態統計」

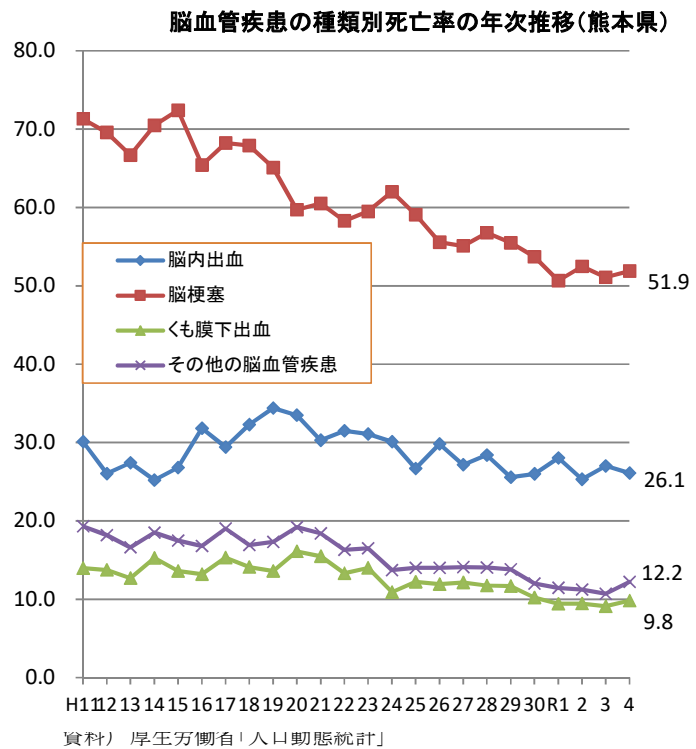
(8) 心不全が1位

本県の心疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、令和4年も心不全が、不整脈及び伝導障害を上回った。



(9) 脳梗塞は前年より0.8ポイント増加

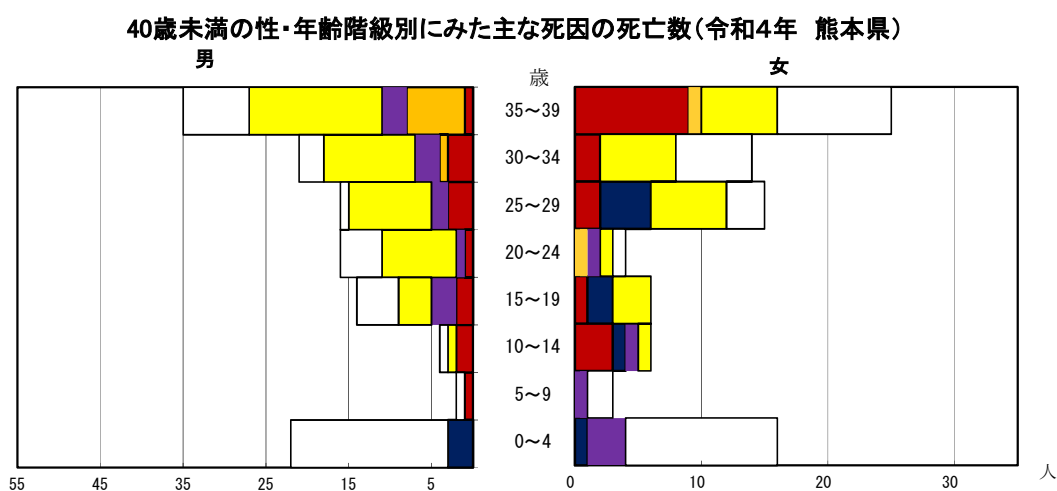
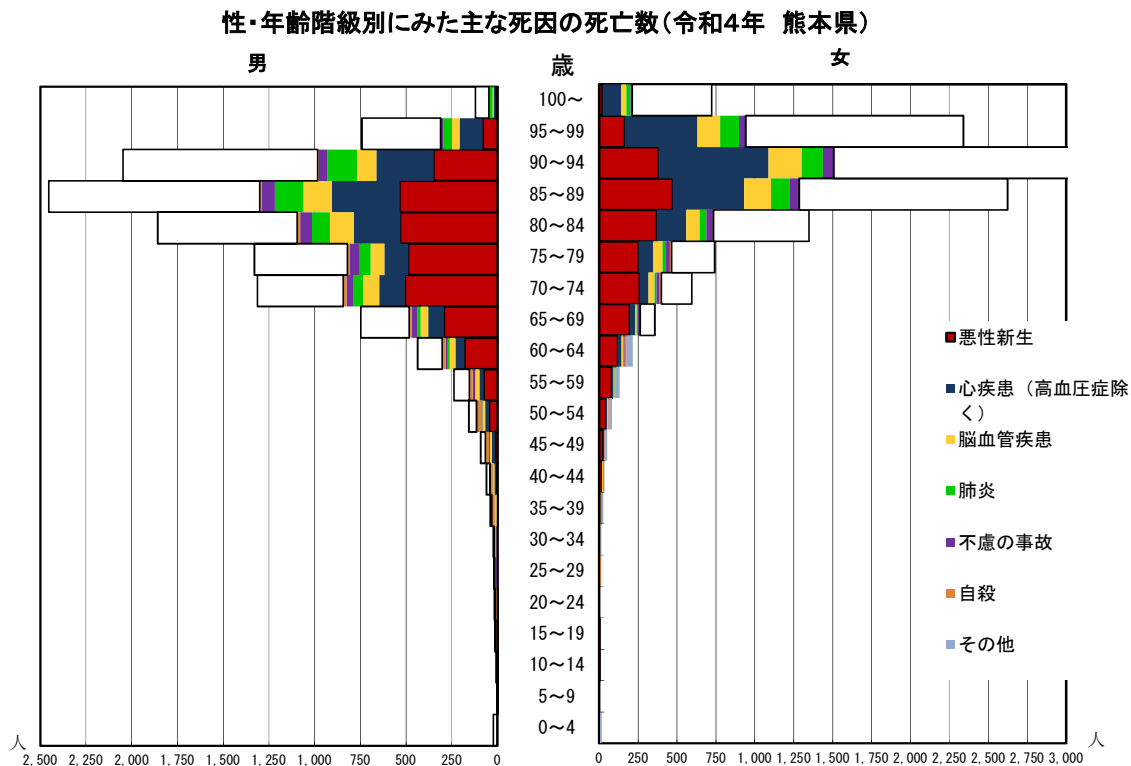
本県の脳血管疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、令和4年は脳梗塞は前年より0.8ポイント増加、くも膜下出血も0.7ポイント増加、脳内出血は0.9ポイント減少、その他も増加している。



(10) 悪性新生物による死亡数は、男女とも85歳～89歳で最多

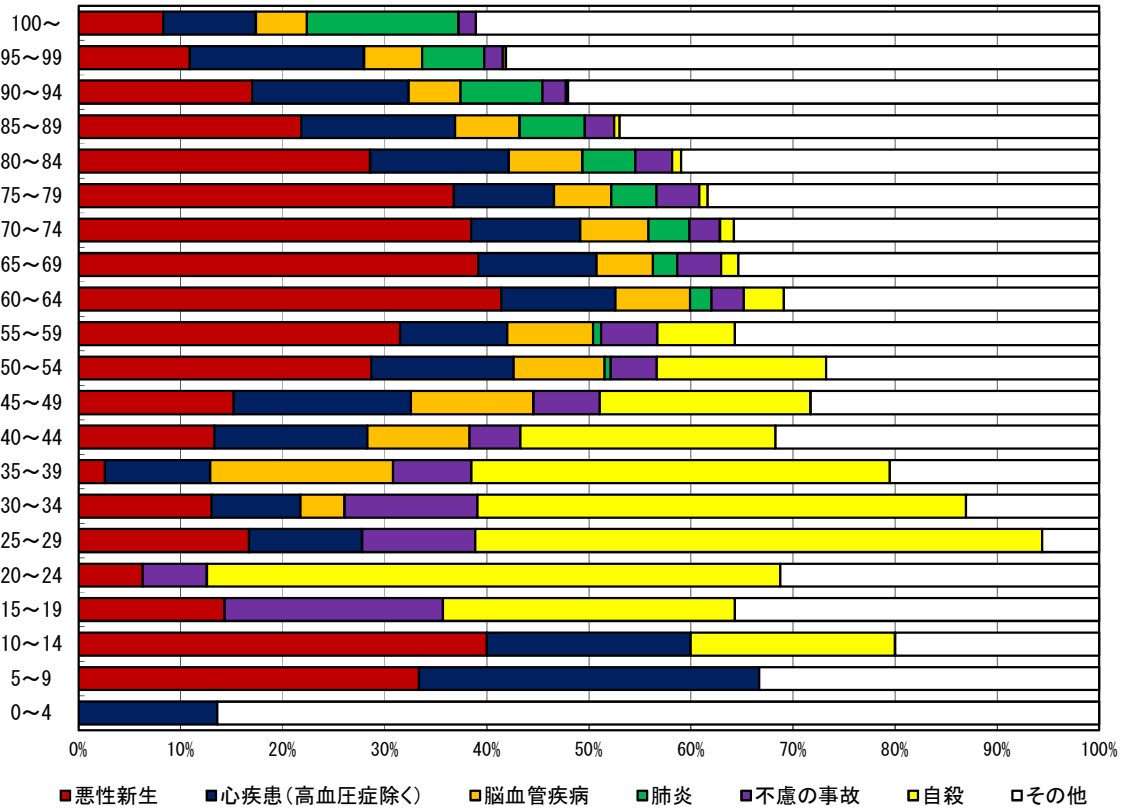
本県の令和4年の死亡数を主な死因別で見ると、全体では男女とも1位悪性新生物、2位心疾患であるが、年齢階級別で見ると、その構成は階級毎に大きく異なる。

また、39歳以下においては、男性の死因の最多は自殺の51人、次いでその他の43人、女性の死因の最多はその他の33人、次いで自殺が23人であった。

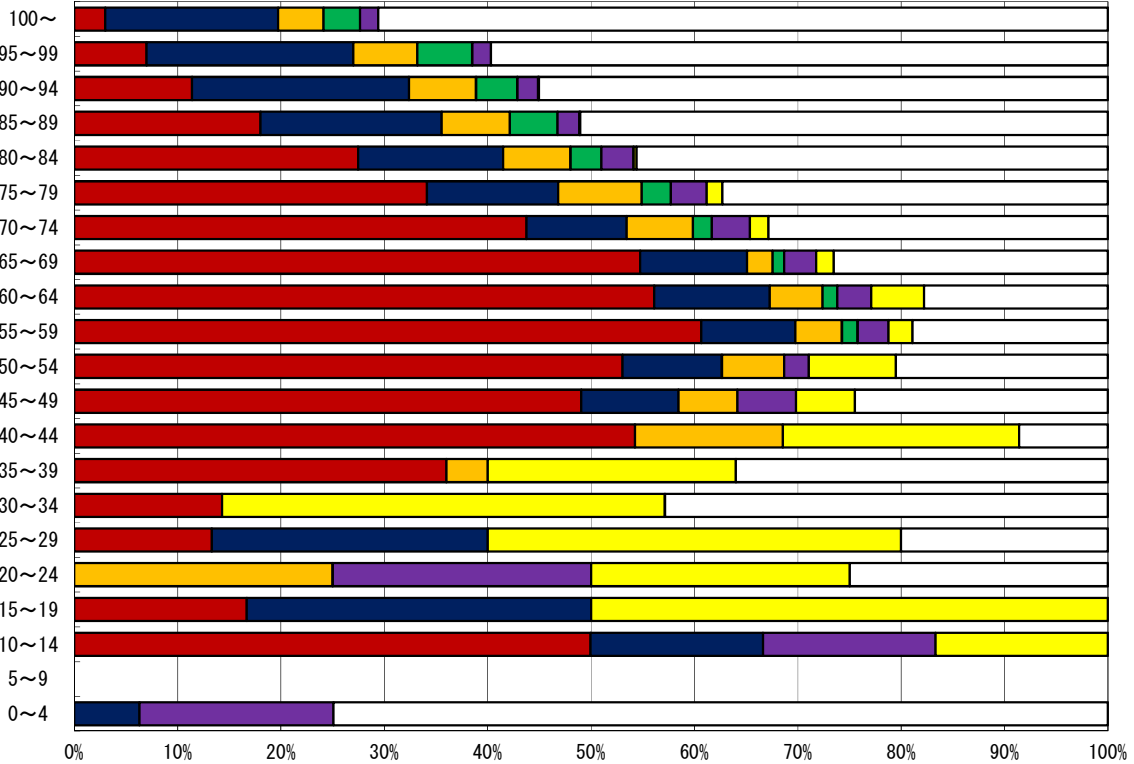


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合(令和4年 熊本県・男)

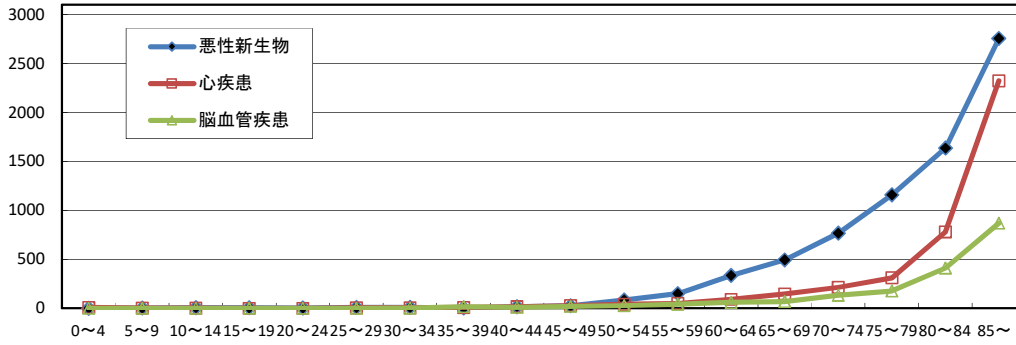


性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合(令和4年 熊本県・女)



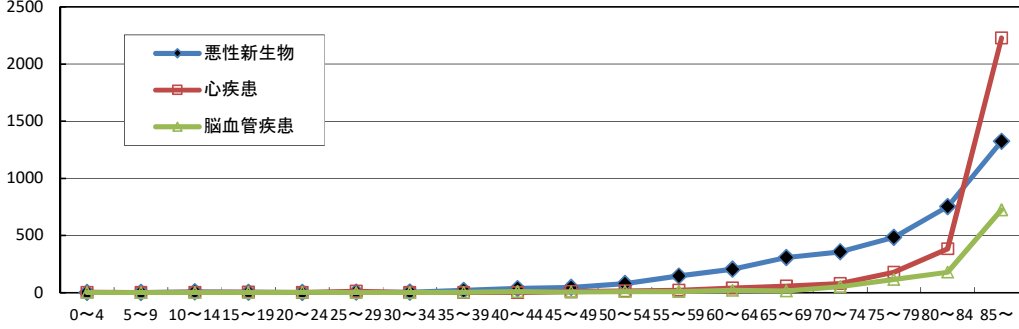
死亡率
(人口10万対)

3大死因の年齢階級別死亡率 (令和4年 男 熊本県)



死亡率
(人口10万対)

3大死因の年齢階級別死亡率 (令和4年 女 熊本県)

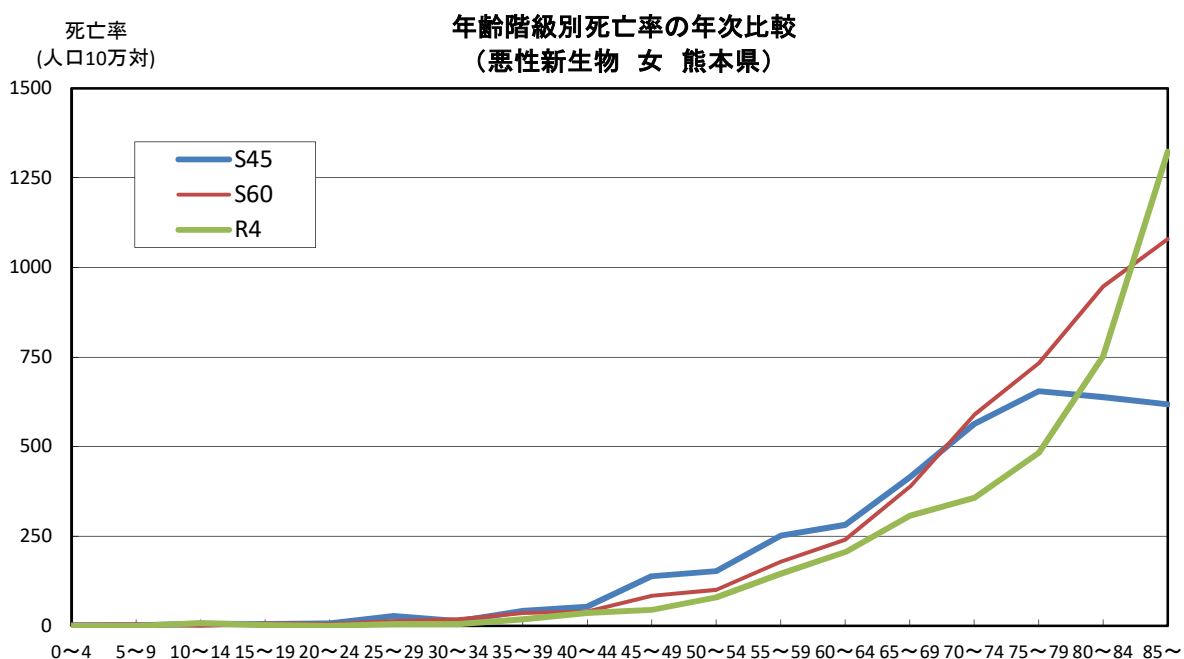
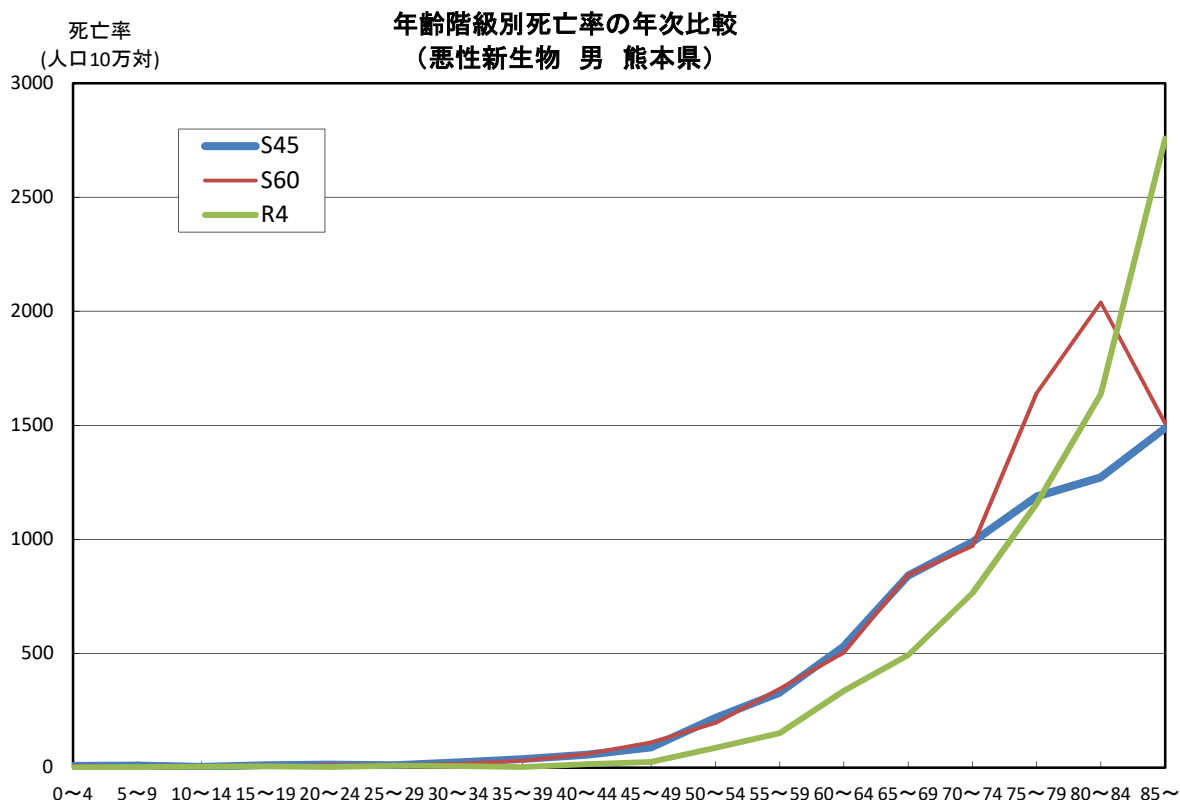


(11) 昭和45年、昭和60年と比較すると心疾患、脳血管疾患は減少、悪性新生物は85歳以上で増加

3大死因の年齢階級別死亡率（人口10万対）を年次別（昭和45年、昭和60年、令和4年）にみると、令和4年の悪性新生物は男女とも85歳以上で大幅に上昇している。

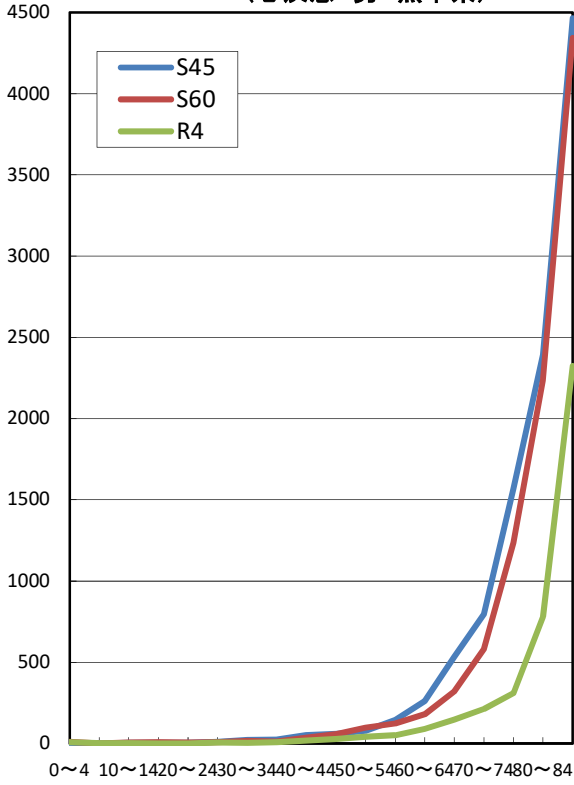
心疾患、脳血管疾患は年次別にみると各年齢層とも大幅に低下している。

なお、心疾患の減少については、平成7年に行われた死因分類及び死亡診断書の改正の影響によるところが大きいと考えられる。

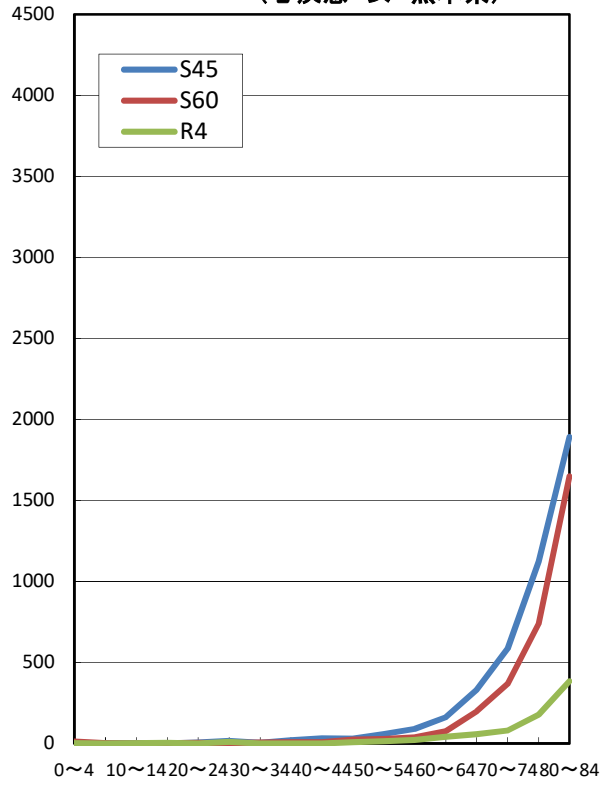


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

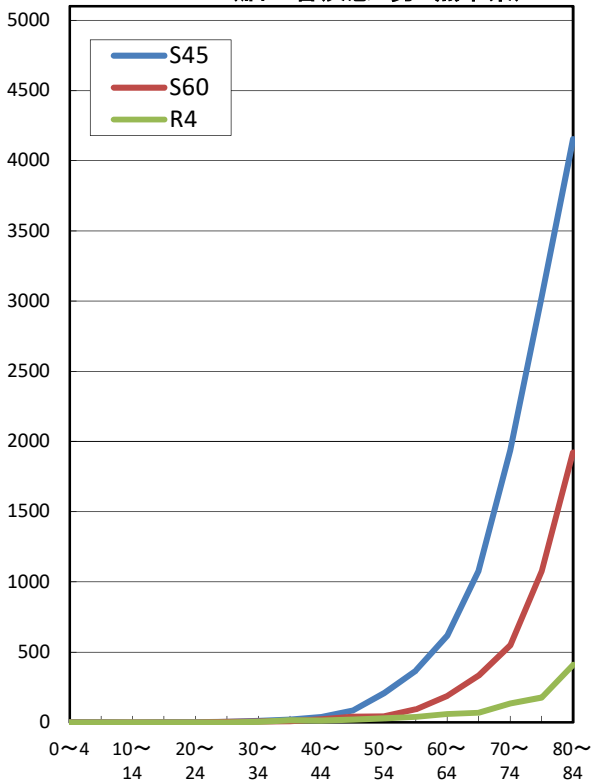
死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**
(心疾患 男 熊本県)



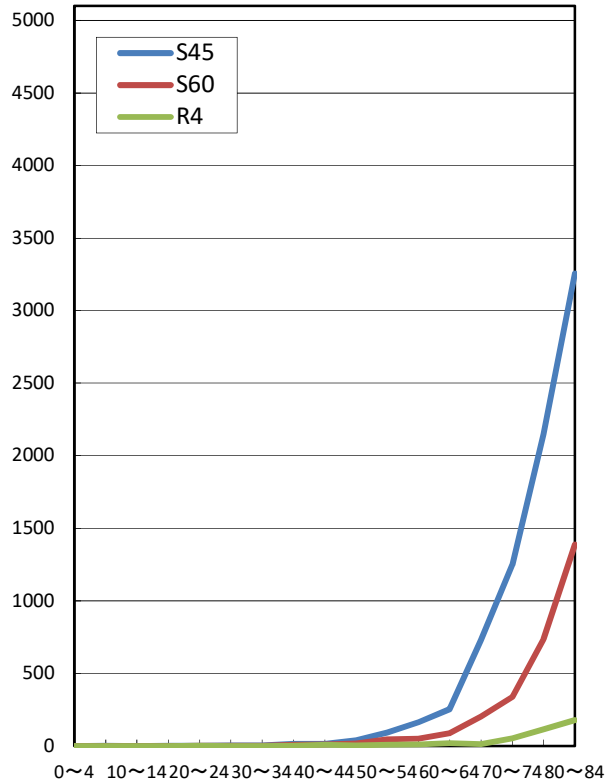
死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**
(心疾患 女 熊本県)



死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**
(脳血管疾患 男 熊本県)



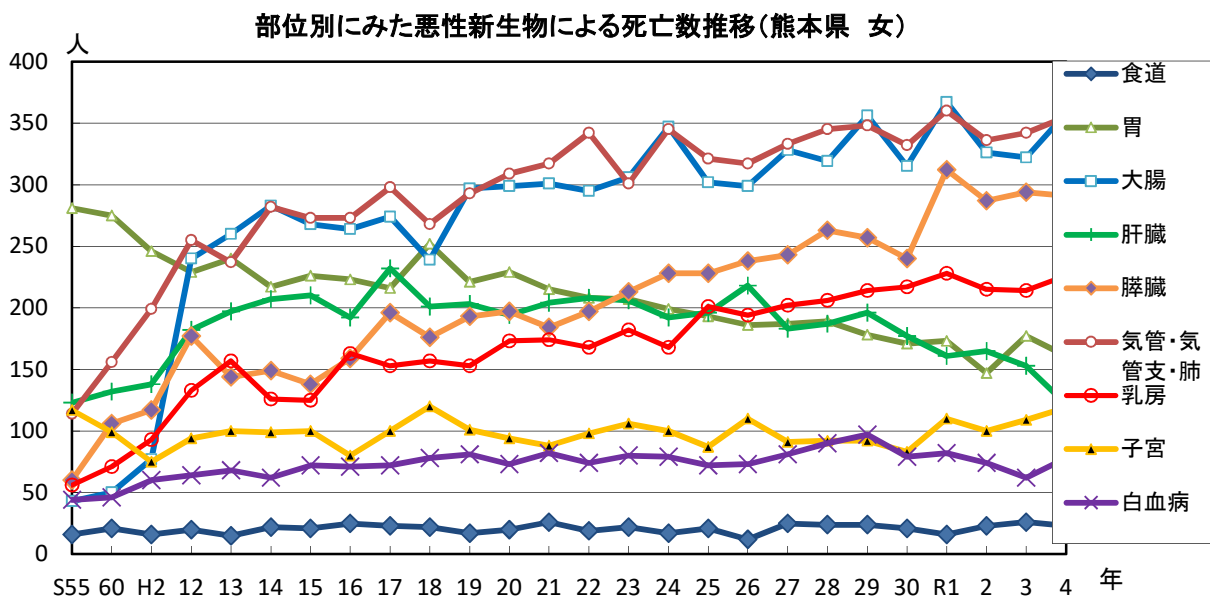
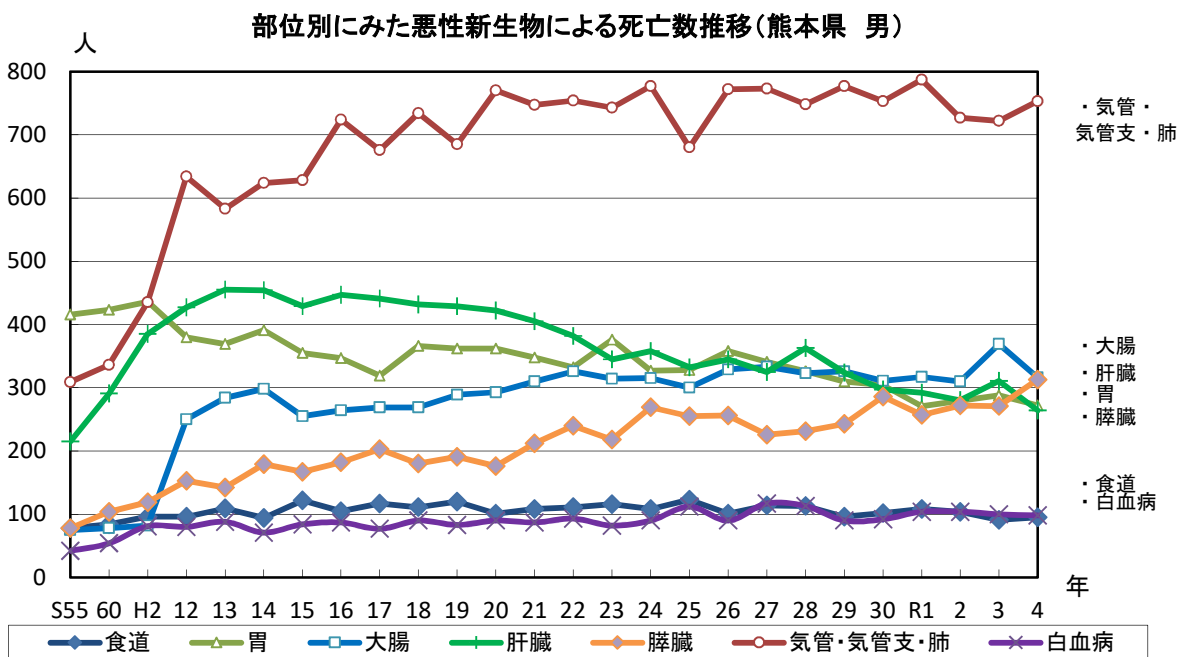
死亡率
(人口10万対) **年齢階級別死亡率の年次比較**
(脳血管疾患 女 熊本県)



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

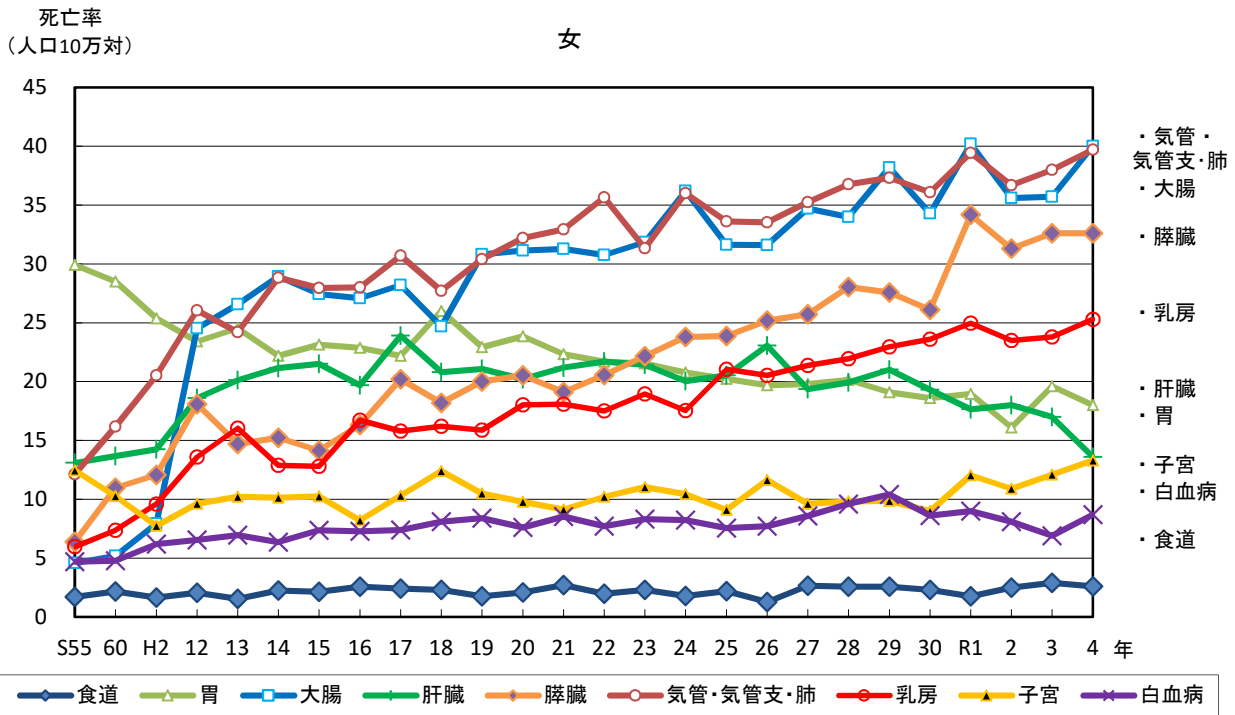
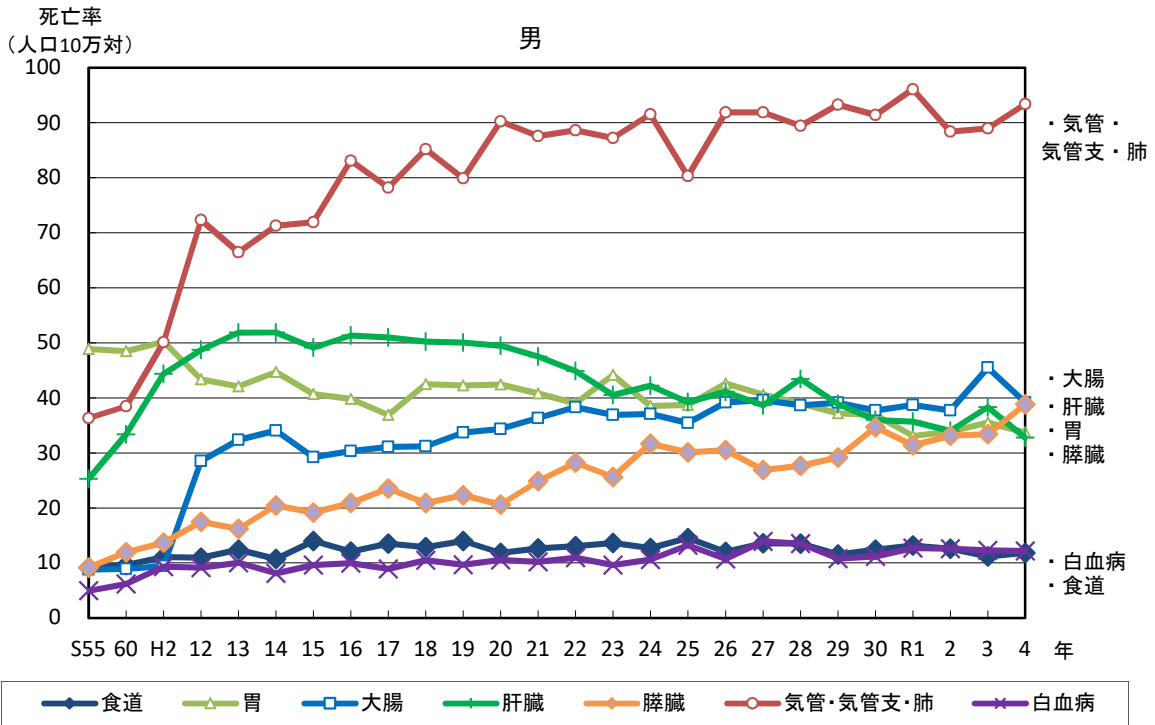
(12) 男性は気管・気管支・肺がんが最多、女性は大腸がんが最多（部位別）

本県の悪性新生物の部位別の死亡数を年次推移で見ると、近年、男性は気管・気管支・肺がんが最多である。女性の令和4年は、大腸がんが最多だった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

部位別にみた悪性新生物による死亡率の推移(熊本県)

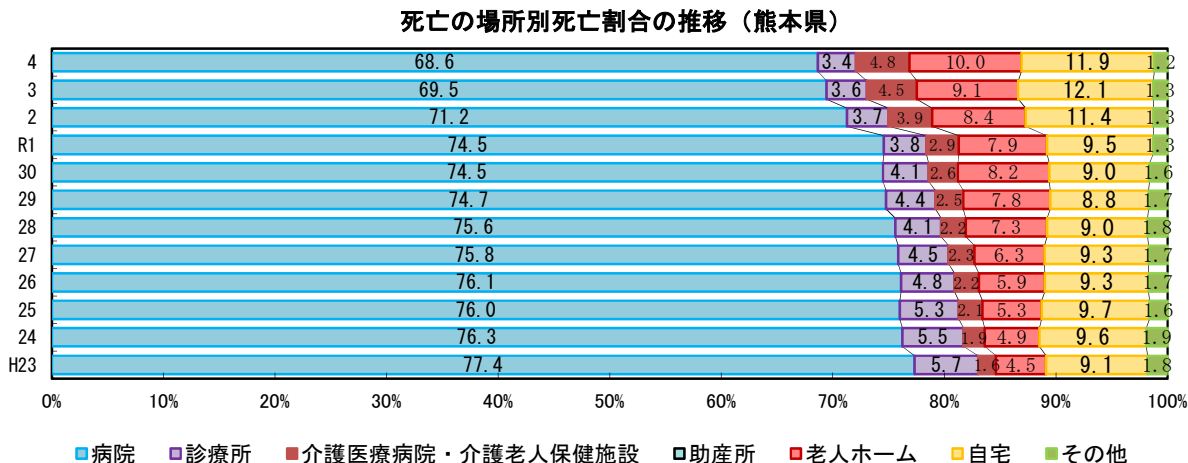


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(13) 医療機関での死亡は72.0%

死亡の場所別死亡割合の年次推移をみると、「病院」における死亡は、令和4年は68.6%で前年より0.9ポイント減少し、「自宅」における死亡は11.9%で前年から0.2ポイントの減少となった。

また、令和4年の「介護医療院・介護老人保健施設」（※平成30年から介護医療院が追加）における死亡は4.8%で前年より0.3ポイント増加、平成7年から死亡場所の分類に追加された「老人ホーム」は10.0%で、前年より0.9ポイント増加となった。



(14) 高齢者の家庭における不慮の事故は、「転倒・転落」が157人で最多

家庭における不慮の事故の種類別にみた65歳以上の死亡者数をみると、令和4年は転倒・転落によるものが157人、その他の不慮の窒息によるものが131人、不慮の溺死及び溺水によるものが118人であった。

家庭における不慮の事故の種類別にみた65歳以上の死亡者数

死因分類コード	死 因	65歳以上の死亡者数
V01-X59	不慮の事故 ※	603
W00-W19	転倒・転落	157
W01	スリップ、つまずき及びよるめきによる同一平面上での転倒	130
W10	階段及びステップからの転倒及びその上での転倒	6
W13	建物又は建造物からの転落	2
W65-W74	不慮の溺死及び溺水	118
W65	浴槽内での溺死及び溺水	96
W66	浴槽内への転落による溺死及び溺水	-
W75-W84	その他の不慮の窒息	131
W78	胃内容物の誤嚥	21
W79	気管支閉塞を生じた食物の誤嚥	71
W80	気管支閉塞を生じたその他の物体の誤嚥	37
X00-X09	煙、火及び火災への暴露	24
X00	建物又は建造物内の管理されていない火への暴露	16
X05-X06	夜着及びその他の着衣及び衣服の発火又は溶解への暴露	2

注) ※家庭における不慮の事故以外の不慮の事故を含む。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」